

# ニッポン

ドクター和の

# 臨終回卷

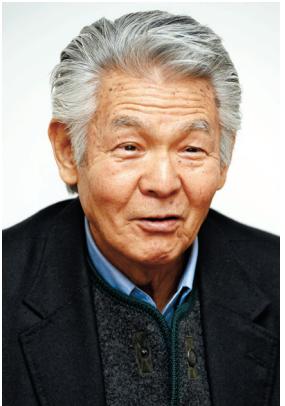


長尾和宏（ながお・かずひろ） 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。西国際大学客員教授。

この連載で先日、高倉健さんを書きました。健さんの死から半月後、もう一人の銀幕スターが旅立たれたことを忘れてはなりません。菅原文太さん、20歳。14年11月28日死去。

07年、文太さんは尿に血の塊を見つけて検査へ行くと、膀胱（ぼうじゆ）がんのステージ2と診断。全摘手術を勧められます。

## 30 菅原文太



菅原文太らしい言葉があるでしょうか。多くの医師は一蹴する事でしょう。男らしさと命どちらが大切か？ どちらなどといふ、

すごい台詞です。これ以上、菅原文太らしい言葉があるでしょうか。多くの医師は一蹴する事でしょう。男らしさと命どちらが大切か？ どちらなどといふ、

文太さんの選択は間違っていました。治療から5年後もがんの影は見当たらず、「俺は完治した！」と快哉を叫んだとか。その後、がん患者さんに

向けて、セカンドオピニオンの大切さについて精力的に講演活動を行うようになりました。

「7年前に膀胱がんを発症して以来、以前とは違う学びの時間を持ち、〈朝に道を聞けば、夕に死すとも可なり〉の心境で日々を過ごしてきました。奥様は次のようなコメントを発表しました。

「がんは人生を二度生きられる」とよくお話をします。がんになったからこそ出会いと気づきが、人生を豊かにするのです。

文太さんはまさに、その手本。がんとの“仁義ある戦い”方を私たちに見せてくれました。

菅原文太さんは、膀胱がんの特徴です。文太さんは、膀胱全摘を拒否。交友があつた。

しかし私は、こういう選択もありだと思います。武士の一分でも言うべき譲れない「何か」が、それの人生にあるのです。

鎌田医師は多くの専門医に声をかけ、温存療法をしてくれる医師を文太さんに紹介しました。治療内容は、3ヶ月の入院で抗がん剤を3回投与、放射線を23回、陽子線を11回照射するというものでした。

文太さんの選択は間違っていました。治療から2年間、文太さんは再発から2年間、文太さんは生きました。その後、がん患者さんに向けて、セカンドオピニオンの大切さについて精力的に講演活動を行うようになりました。

「がんは人生を二度生きられる」とよくお話をします。がんになったからこそ出会いと気づきが、人生を豊かにするのです。

# がんとの仁義ある戦い